パスカルの《アポロジー》のプラン復元に関して (XX)

Sur le plan de l'《Apologie》de Pascal (XX)

竹　下　春　日

われわれは，拙論XI回において，《A. P. R.》の解釈を提示した。しかし《A. P. R.》は，《AP.R.》(A に省略点のないことに注意）と解すべきだとする説が，存する。最近においては，前田陽一氏の所説が，これである。以下われわれは，氏の意見に対し，われわれの自身の見解を披歴することにしたい。

I　《A.P.R.》の《A.》の筆蹟について

パスカルの『パンセ』中の断章 La. 237-Br. 416 には，《A.P.R.》なる略語が，存する。これについて，前田氏は，「ここでの『A』の右下に見える点らしいものは，その位置と広さから見て『A』のいったんとぎれた末尾と解した方がよく，…」[1] と述べ，「結論としては，私もル・ゲルンと同じく，従来の伝統的見解に組するものであって，問題の三字が『ポール・ロワヤルにおいて』の略字であると考えるものである。」[2] と解している。しかし《A.》――パスカルは筆記体の *a* をもって記している――は，筆記体 *a* と省略点とを，連続的にかつ敏速に書けば，すなわち *a* の右辺の延長線上に，同一筆勢で省略点を打てば，筆勢の関係で，省略点が恰も *a* の「とぎれた末尾」の如き観を呈するのは，当然の事であって，これをもって直ちに「とぎれた末尾」と断定することは，許されないのである。

だが以上によって，われわれはこの断章の《$A_{(.)}$P.R.》(追記参照）中の《A》

が《A.》であると断定するものでは，決してない。《A.》の省略点と見られるものは，省略点でないかも知れぬからである。ただわれわれは，これが「省略点ではない」と断定することも出来ないということを，主張するのみである。したがってこの場合は，不明であるとするのが，客観的に正しい判断である。われわれ自身の立場からすれば，何れでもありうるのである。

Ⅱ　《A(.)P.R.》にかんする諸疑問点

《A(.)P.R.》をすべて《A P.R.》（ポール・ロワイヤルにおいて）と解するならば，次のごとき種々の疑問点が生ずる。

(イ)——(a) 先づ略語の簡略さという点から，検討を始めよう。パスカルは，なぜ《A P.R. Pour demain》（A に省略点がない）および《A.P.R. pr Demain》（A に省略点がある，pr は pour の略字）という風に，「ポール・ロワイヤルにおいて」と《明日のために》という二語を，並記する必要があったのであろうか。ポール・ロワイヤルで講演をする以上，この場合に限って，それぞれ《Pour demain》，《pr Demain》（以下 pr は pour と記す）の二語のみの記入で，十分ではあるまいか。パスカルが，ポール・ロワイヤル及びポール・ロワイヤル以外の場所で，すなわち二個所以上の場所で，講話を行う予定であったとするならば，《A(.)P.R.》の略語を記す必要はあったであろう。だが講演の場所は，『パンセ』の序文では，ポール・ロワイヤル以外の場所で行われる予定であったという形跡は，見られないのである。しかも《明日のために》とある以上，ポール・ロワイヤルにおける講演の期日は，この語が記された時点に，極めて近い時点であったと，見られる。したがってパスカルは，自分の記した《明日のために》という語を見れば，必然的にポール・ロワイヤルなる講演会場を連想しえたはずである。それゆえ，「ポール・ロワイヤルにおいて」を意味するにすぎない《A P.R.》および《A.P.R.》の二語は，パスカルにとって，敢えて記す程の必要性はなかったと，言えよう。

(b) 次にわれわれが，略語の語義の明瞭さという点について考察するとき，パスカルは《A P.R. Pour demain》なる表現を使用する必然性が，ないとい

うことである。なぜなら，この語句が，原語たる《A Port-Royal》よりも語義明瞭でないことは，明らかだからである。前者の場合は，綴字の総計は13個であり，後者の原語の場合は，11個(ハイフンを含む)である。それゆえ，原語を使用した方が，語義明瞭であるばかりでなく，綴字が少数で，書記に便利である。

期日の《明日のために》にかんしては，既述のごとく，この語の意味上近い将来と考えられるから，《A Port-Royal》なる語を眼にすれば，直ちに期日を想起することは，パスカルにとって容易であろう。したがって《明日のために》という語を，殊更記す要は無いのである。

以上のごとく，略語の簡略さおよび明瞭さの点において，いずれも不徹底，不合理であるにもかかわらず，何故パスカルが敢えて上記のごとき略語を使用したのか，われわれは不可解の念を禁じえないのである。

(ロ)——さらにより詳細に考察するとき，そもそも《A P.R.》,《A.P.R.》の前置詞 A なるものは，果して必要であろうか。《明日》行われるべき講話の場所が，ポール・ロワイヤルに決まっているならば，前置詞《A》は必ずしも必要ではないと，言えよう。パスカルは，彼の書簡に日附・場所を記すとき，《A Paris》・《De Paris》等のごとく，しばしば前置詞を用いている。これは慣習上，儀礼上また相手に場所を明示する上か言って，当然であろう。とはいえパスカルは，彼の父の死去にかんするペリエ夫妻宛書簡中では，《Paris, du 17 octobre 1651.》として，《Paris》の前に前置詞を記してはいないのである。

この事態を，メモとして記した《A(.)P.R.》の場合と，比較して検討してみよう。手紙の場合は，場所を理解すべき相手（宛先受取人）は，言うまでもなく彼（パスカル）自身以外の他人である。しかし《A Paris》とせず《Paris》としても，意義不明になることはなく，正しく相手（前記夫妻）に理解せられたであろう。このことは，《A(.)P.R.》の場合，より一層よく当てははまる事である。なぜなら，メモにおいて相手なるものは，他人ではなく，じつに彼自身だからである。したがって手紙の場合以上に，メモの場合には前置詞が不要であると，言いうるのである。

しかも(イ)において触れたごとく，ポール・ロワイヤルにおける講話の予定日

は，《明日のために》と記されていることから判断しうるように，この語を書き込んだ時点に極めて近い時点であったと，考えられる。講演の日の前日という説さえあるくらいである。[3] したがって Port-Royal の略語を，他の『パンセ』の原稿と区別するため，特に記入する必要があったにせよ，前置詞を欠いたからと言って，パスカル自身にとって，講演会の場所名が，——この短期間中に——彼の脳裏にあって，消失ないし不明になるということは，全くありえない。特にこの場所なるものが，パスカルにとって熟知のポール・ロワイヤルであるからには，なおさらのことである。

しかるに前置詞Aは，略語4個のすべてに，例外なく附せられているのである。さらに《Pour demain》・《pr Demain》の二個の場合には，上述(イ)のごとく，不要なはずの《A P.R.》・《A.P.R.》が，それぞれ書き込まれているのである。われわれはこの二重の事実にかんし，あまりにも執拗すぎるパスカルの作業に対して，一種の驚きと疑念とを抱かざるをえないのである。かくして「ポール・ロワイヤルにおいて」と解することによって，一見なんらの疑問をも喚び起こすともみえぬ《$A_{(.)}$P.R.》の略字は，敍上のごとく，仔細にこれを検討考察するとき，一つの大きな謎となって，われわれの前に立ち現われるのである。

Ⅲ 《$A_{(.)}$P.R.》の位置について

以前の拙論において述べたごとく[4]，パスカルは彼の死去に近い時期まで，不要もしくは不適当な表現を，部分的にもしくは全部を抹消して，原稿の完成度を高めることを，目指していたのである。したがって《$A_{(.)}$P.R.》が《A P. R.》に尽きるならば，ポール・ロワイヤルにおける講演後は，この略語は不要であり，抹消されて然るべきものである。だが，この略語は4個とも全部が，抹消されず残されているのであって，われわれは玆に第一の不合理を見出すのである。

次にパスカルは，暫定的事項にかくしては，欄外に書き込むという処置を採っている。例えば，《Il faut commencer par là le chapitre des puissances trompeuses.》なる指示事項は，La. 82-Br. 83 の欄外に記されているのであ

る。《A P.R.》は臨時的な性格の名称であるから，この場合欄外に書かれるに相応しいものである。だが《A(.)P.R.》は，4個のすべてが欄外に書かれてはいないのである。われわれはこれにも，疑念を拘かざるを得ないのである。

では《A(.)P.R.》は，どのような位置に書かれているであろうか。この略語のすべてが，本文と接続する個処に，あるいは本文と近接した場所に記されているのである。そうしてかかる位置こそは，まさに暫定的ないし仮称としての章名に相応しいものである。それゆえ，われわれは《A(.)P.R.》を，少くとも暫定的章名と解するのである。

最後にわれわれは，《A(.)P.R.》が《A P.R.》であるにもかかわらず，なぜ抹消されず残されたのであるか，に関する理由について，論じてみたい。この理由を，われわれは一応《アポロジー》の未完成に帰しうるが，これは原因説明としては，論理上不十分である。なぜなら，同じく未完成という状況のうちにありながら，複数の章名中の一個が抹消されている事実が，存するからである。写本中のタイトル表に見られる《Opinions du peuple saines》なる章名の抹消が，即ちそれである。同じ状態の下にありながら，諸々の章名のうち，或るものが残存し他方が抹消されているという差異は，この未完成という状態そのものの存在の指摘のみでは，十分説明し尽すことはできない。章名が未決定であれば，その著作は未完成と言いうるが，逆に著作が未完成であるとしても，章名が未決定であるとは限らないのである。章名がすべて完成していても，著作としては本文の不備のゆえに，未完成であるという場合も，ありうるからである。《A P.R.》および《A.P.R.》の残存の原因したがって La. 309 の断章が章名を欠く所以を，著書の未完成をもって説明することは，論理上不完全と言わざるをえないのである。

以上を簡略に再言すれば，《A(.)P.R.》が本文の内容とかけ離れた《A P.R.》に過ぎないものではないからこそ，草稿に見られる位置に記されたのであり，この事は該略字が少くとも暫定的章名であることを，証するものである。そうしてこれを裏附けるものは，《アポロジー》に属する全断章において，本文に近接して記されたタイトル・小見出しは，すべて本文内容との直接的関係を推測しうるものの**のみ**である（追記2参照），という事実である。それゆえ《A(.)P.R.》

は，本文の内容を表示するものと，類推しうるのである。もし《A(.)P.R.》が本文の内容と無関係であって，講演会場を指示するのに過ぎないならば，パスカルにとっては，実際に書き込まれた個処を空欄にして，これらの略語を欄外に記せば済むことである。後から正式章名を決定して，これを書き込む場合の手数（略字を抹消して，その脇に章名を記すこと）と体裁とを考えれば，――況して本文を書いた後の処置であるからには――こうした欄外に書くという処置の仕方は，極めて自然かつ合理的である（略語を抹消する手数が省けて体裁も良い）。実際，後からの加筆訂正を予め考慮して，行文の間隔を適当に開けて執筆したパスカルが，かかる配慮に欠けていたとは，想像し難いのである。言い換えれば，《A(.)P.R.》が章名であるからこそ，本文が書かれた後であっても，無理にタイトルの記されるべき位置に，他のタイトルと同様，書き込まれたのである――4回のすべてに汎って。かくて《A(.)P.R.》をもって，正式章名ないし暫定的章名と解するわれわれの立場は，決してたんなる想像の所産にすぎないのではなく，まさに合理的なる見解と言いうるであろう。

Ⅳ 《A P.R.》と章名について

(1) La. 309-Br. 430 中の終りの方の《A.P.R.》における《A.》に省略点が，あるべきものでないとすれば，この断章中の《A(.)P.R.》はすべて「ポール・ロワイヤルにおいて」(A P.R.) という意味になり，著作の章名としては，不似合なものとなる。なぜなら，前にも述べた如く，この断章の敍述内容と略語の意味するところとが，あまりにも懸隔があり過ぎるからである。

この点において，Sellier が説いているところは，妥当であると言いえよう――〈D'autre part,《A.P.R.》serait-il la seule liasse du projet de 1658 dont le titre soit sans rapport sémantique avec le contenu?〉[5]

(2) さて上述および以下の論述内容と関係のある重要事について，考察しなければならない。この重要事とは，パスカル自身の執筆計画ないし敍述方針の性格，特徴なるものを，知ることである。パスカルの甥 Etienne Périer は，次のごとく証言している――〈… il [Pascal] avait toujours accoutumé de

songer beaucoup aux choses et de les disposer dans son esprit avant que de les produire au-dehors, pour bien considérer et examiner avec soin celles qu'il fallait mettre les premières ou les dernières, et l'ordre qu'il leur devait donner à toutes, afin qu'elles pussent faire l'effet qu'il désirait.〉[6], 〈…pour écrire les choses qu'il avait déjà digérées et disposées dans son esprit;〉[7], 〈lui qui savait disposer les choses dans un si beau jour et un si bel ordre,〉[8]

以上のごとき Périer の叙述は，血縁者のパスカルに対する過大評価では，決してない。パスカルの著作執筆の際における，綿密周到なる計画，細心熟慮の習慣は，彼の数学・物理学の諸論文ならびに学術的論議にかんする書簡類を通読するならば，十分に首肯しうるところであって，これを疑うことはできない。

(3) 既に(1)において述べたごとく，《A P.R.》(ポール・ロワイヤルにおいて)は，章名ではありえない。したがってパスカルは，彼の死に到るまで，この断章 (La. 309-Br. 430) に，なんら章名を附与しなかったことになるが，この期間は年数においてどの位いであったであろうか。Lafuma によれば，パスカルのポール・ロワイヤルにおける講話は，1958年 10—11月に行われたものであり[9]，Mesnard は，講話の行われたのは，1958年5月頃としている[1]。而してパスカルが世を去ったのは，1662年8月19日である。それゆえ，該断章名は，3年間も未決定であったことになるのである。この約3年間に，彼はじつに約350個（抹消断章の数を含む)に達する未分類断章(N.C.)の大部分を，執筆していたのである。

(4) 次にパスカルは，彼の《アポロジー》にかんする著作については，恐らく極めて大なる関心を拘いていたに相違ないから，したがってこの著作の章名にかんしても，これに無関心であったとは，考えられないのである。事実彼は，La. 82-Br. 83 の欄外に，《Il faut commencer par là le chapitre des puissances trompeuses.》と書き込んでいるのであって，この文中の最後の語は正式章名ないし暫定的仮称としての章名と，見做しうるものである。また写本中のタイトル表に見出される章名の一つ——《Opinions du peuple saines》

は，抹消されているのである。また，《アポロジー》のためのリヤス (liasses 断章綴)中には，内容たるべき断章を記した紙片を綴り込むことなく，章名(15° bis《La nature est corrompue.》)のみを記した文書を，見出すことができる。さらに La. 29-Br. 60 中には，《第1部》および《第2部》の各タイトルの試案(2通り)が，掲げられている——《Première partie: Misère de l'homme sans Dieu. Seconde partie: Félicité de l'homme avec Dieu.

Autrement: Première partie: Que la nature est corrompue. Par la nature même. Seconde partie: Qu'il y a un réparateur. Par l'Ecriture.》

こうした諸事実こそは，パスカルが彼の著作の章名およびタイトルにかんして，少からぬ関心を有していたことを，示すものである。

(5) 敍上の如き章名の欠如の理由としては，自ずから次のことが，想像される——すなわち，「パスカルは，この断章 (La. 309) の章名附与にかんして，内容に相応しい名称を得ることに，困難を終生感じたためではあるまいか」と。それゆえわれわれは，この点にかんして，該断章の内容を検討する要が，存するのである。しかし，われわれがこの fr. を通読するとき，問題となっている当の断章は，内容全体を把握する上から言って，決して理解困難なものではない。また，この内容に相応しいタイトルを見出しえない程，その敍述するところは複雑でも，不明瞭でもない。Filleau および Périer による各『パンセ』の文中におけるこの fr. の内容に相当する部分の解説もまた，それぞれの解説自体に困難を感じた形跡は見られない。したがって，この断章に章名を与えることは，決して困難ではなく，むしろ容易でさえあるのである。事実，この断章 La. 309-Br. 403 に対して，Ernst は「一般的序論」Introduction général なるタイトルを附与しており[11]，われわれ自身もまた仮りに章名を与えるとすれば，次の名称を容易に指摘しうるであろう——「第1部から第2部への移行」[12]，「人間本性の矛盾とその理由」，「人間本性の矛盾を解きうる唯一の宗教」，「人間の状態と隠れた神」等々。

またパスカルは，この断章をポール・ロワイヤルにおける講話の原稿としたことが，察しえられるが，聴衆にとって理解し難いものを，彼が話す筈もないと言いえよう。なぜなら，パスカルは容易に説くことを，平常旨としていたか

らである。これにかんし，彼の姉 Gilberte は，明瞭に次のごとく述べている——〈Un des principaux points de l'éloquence qu'il [Pascal] s'était fait, était non seulement de ne rien dire que l'on n'entendît pas ou que l'on entendît avec pêne, mais aussi de dire des choses où il se trouvât que ceux à qui nous parlions fussent intéressés, …〉[13].

(6) 既にわれわれが敍上において触れたごとく((1)および(3))，パスカルは，今われわれが採り上げている断章の章名を，終生決定しなかったのである——もし《A.P.R.》を〈A Port-Royal〉と解するならば，斯く言わざるをえない。しかも約3年間，彼は数多くの未分類断章を執筆していたのである。かかる未分類断章中に，われわれは次の一断章を見出す——《もしもすべての人が，それぞれが，他の人たちの言っていることを知ったとしたならば，この世に四人と友人はあるまいということを，私はあえて提言する。このことは，人が時に不謹慎な告げ口をするところから生ずる喧嘩によっても，明らかである。（私はさらに進んで言う。すべての人は…）》(La. 154-Br. 101)。この引用文中の最後の括弧内の文章は，パスカル自身によって抹消されたものである。この抹消作業自体の重要性は，抹消された文章の内容から判断して，La. 309-Br. 43 の章名附与という作業の重要性に比して遙かに劣るものである。言うまでもなく，一個でも章名を欠けば，著作の未完成の度合は，——かかる重要度において劣る抹消作業が行われず，しかも章名がすべて完備している場合に比して——大であることは，明らかである。

(7) 以上(1)より(6)に到るすべてを綜合判断するとき，われわれはそこに大いなる矛盾ないし不可思議の現象と出会うのである。すなわちパスカルは，著述にかんしては内容を熟慮し，その著作計画については綿密細心に配慮を行う性格(2)であったのであり，また彼の著作の章名にも決して無関心ではなかったのである(4)。しかも容易に行いうる章名附与という作業(5)を，十分な時間的余裕があったにもかかわらず(3)，重要度において劣る一断章中の文尾抹消という作業に意を用いて(6)，遙かに重要性をもつ章名の決定という作業を，終生放置しつづけていたことに成るのである。

或は敍上の(5)を別とすれば，次の如く解することも可能である——パスカル

は，一生かかってもその内容に相応しいタイトルを決定しえなかった程未完成のもの（原稿内容）を，神学の専門家を含む聴講者たちの前で，発表したということに成ると。パスカルが《アポロジー》未完成の故に，この断章に最終的決定的章名を与え得なかったとしても，なぜ暫定的章名を与え得なかったかは，依然として不可解である。なぜなら，パスカルは《アポロジー》の章名に関する暫定的処置を示した諸断章を，残しているからである——La. 29-Br. 60, La. 38-Br. 290, La. 82-Br. 83, La. 459-Br. 289, etc. 即ち，仮称としての章名さえも決定し得ない程の不完全な内容のものを，人々の面前でパスカルが話したとは，到底われわれの想像しえないところである。

つまり疑点を簡略に述べるならば，次の如くである——この断章（La. 309-Br. 430）の内容が，パスカル自身にとって，容易に章名を与え得るものであったならば，なぜ彼は一章を構成すべきこの断章に対して，一生涯タイトルを附与しなかったのであろうか。また反対に，この断章に対してパスカル自身章名を与えることに困難を感じていたとするならば，即ちこの断章の内容が暫定的章名さえも決定し得ない程複雑不統一かつ理解困難なるものであったとするならば，何故パスカルはかかるものを，講話の内容としたのであろうか。この際原稿の内容は彼にとって意義重要なる，しかも多くの人々を説得すべき《アポロジー》の要約を構成するものであり，而してその聴衆はパスカルにとって世人にもましてその理解を必要としていた，ポール・ロワイヤルの仲間たちであったのである。したがって講話の内容は，少くともタイトルを附与しうる程度に理解容易のものであるのが，当然である。而もパスカルは前述（Ⅳの(5)）のごとく，日頃分り易く説くことを，彼の方針としていたのである。それ故パスカルが極めて複雑難解なるものを，聴講者の前で説いたとする仮定は，成立し得ないと言えよう。何れにせよ，われわれは以上において，われわれの理解しえざる不合理を見出すのである。

Ⅴ　われわれの綜合的解釈

以上のように，《$A_{(.)}$P.R.》を「ポール・ロワイヤルにおいて」（A P.R.）と

解することは，種々重大なる疑問を誘発するのであるが，然しわれわれは，「ポール・ロワイヤルにおいて」の意味において，パスカルが該略語を用いたことを，決して否定するものではないのである。

われわれは，《A.P.R.》を《Apologie (à ou de) Port-Royal》の意味における略語と解すべきことを，主張して来た。しかもこのこと自体は，直前に説いたごとく，「ポール・ロワイヤルにおいて」の意味の《A P.R.》を否定するものではない。《A P.R.》を「ポール・ロワイヤルにおいて」の意味にのみ限定する解釈を，否定するのである。従来の諸家は，《$A_{(.)}$P.R.》を，「ポール・ロワイヤルにおいて」の意味における《A P.R.》か，あるいは《Apologie à Port-Royal》その他の意義における《A.P.R.》か，のいずれかと見る二者択一的解釈を主張してきた。これは，決して正しい見方ではない。パスカルの草稿に，両者が存在する以上，われわれはこの客観的事実の意味するものを卒直に認めるところから，出発しなければならない。諸家の解釈の無理は，じつにこの原事実を直視せぬところから生じたのである。

《A P.R.》は，事実「ポール・ロワイヤルにおいて」を意味していたのである，しかしこれはパスカルの講話が終了する迄のことである。講話終了後，これは《A.P.R.》を意味する予定であったのである。そうして爾後《A.P.R.》は，拙論（XI回）において論じたごとく，《Apologie (à ou de) Port-Royal》および《Apologie pour(le) Remède》の二義ないし三義を，意味することになったのである。パスカルは，《A P.R.》→《A.P.R.》を，彼の講話以前から計画していたのである。かかる計画的思考こそ，パスカルの綿密周到なる著作態度に相応しいものである。そうしてこのパスカルの予定こそ，《A P.R.》（ポール・ロワイヤルにおいて）なる臨時的性格の略字が，抹消もされずまた欄外に記されもしなかったことの，真の原因だったのである（《明日のために》が残された理由については，VI 参照）。われわれは，パスカルがかかる深慮を持ちえなかったであろうと憶測することによって，この天才の思考的性格を軽視してはならない。Amos Dettonville, Louis de Montalte, Salomon de Tultie なるアナグラムを案出した彼にとって，この程度の計画的配慮を行うことは，容易でさえあったことを，われわれは理解しなければならないのである。

それではなぜパスカルは，この略字をすべて《A.P.R.》としなかったのであろうか。これは，後出（Ⅶ）のパスカルにおける書記の特性とも見られるが，次の如き推定も可能である——それは，《A P.R.》を記した時が講演以前であったからであり，ポール・ロワイヤルの人たちの承認なしに《Apologie (à ou de) Port-Royal》の略語たる《A.P.R.》にすべてを統一することは，彼の良心が許さなかったと，おもわれるからである。パスカルがポール・ロワイヤル入門後，彼自身に対して内面的に厳しかったことは，彼の実姉の証言によって明らかである。即ち，彼は自己が得意な気持になることを防ぐために，棘の出た鉄の帯を着けて，この棘による苦痛を利用したのであるが，この事実はパスカルの良心的行為を示す一例であると，言いうるであろう[14]。

しかも他方において，《A.P.R.》の略字が存するのは，本格的執筆の際に役立てるためであったと，言いうる。かくして『パンセ』の草稿には，二種の略字が残存することになったのである。われわれはそれゆえ，《$A_{(.)}$P.R.》の二重の意義を承認することこそ，真に客観的事実[15]に即した合理的解釈であると，信ずるものである。

Ⅵ 《明日のために》について

既出の《明日のために》(Pour demain, pour Demain) の語が書き込まれた理由について，少しくわれわれの推測を述べておき度い。この語は，一応語義の上から解するとき，パスカルの講演会の前日に記されたものと，考えられる。しかしこの解釈は，忘却防止という書記の必要性から見るとき，この語を記した時点から24時間以内に，講話の期日にかんするパスカルの記憶が消失しうるという可能性を前提することになり，甚だしく常識を逸脱するものであって，承認し難い。しからば，この語はなぜ書かれたのであろうか。この語は，期日そのものをたんに表示するばかりでなく，講話内容の区分と順序を意味するものとして，説明しえられる。すなわち，《$A_{(.)}$P.R.》の略字が記されている敍述は，全部で4個あるが，このうち2個にのみそれぞれ《Pour demain》，《pour Demain》の語が，附加されているのである。したがって，これらの語

のない2個の敍述が，《明日のために》の語を有する敍述の前日に話される予定であったと，見られる。言い換えれば，講話は当日とその翌日の二回に分けて，行われる予定であったのである。それゆえ《明日のために》の語は，遅くとも講演会の当日，講話の行われる前に記されたものと，推定しうる。しかし『パンセ』の序文中には，二日間に汎って行われたという記述は見出されないので，実際はなんらかの事情で，一日のみで講話を終了したのであろう。

われわれは最後に，《Pour demain》・《pour Demain》が，何故該個処に残されたか，について触れておきたい。それは，抹消も欄外に記すことも，何れもパスルにとって，必要ではなかったからである。抹消された断章は，不必要であったが，逆に不必要なものが，必ず抹消されるわけではない。《Pour demain》および《pour Demain》は，余りにも本文内容と無縁であったので，反って抹消されもせずまた欄外に置かれもしなかったのであると，推定しえよう。換言すれば，これらの処置を免れた程，これらの語はパスカルにとって，断章本文と無関係であることが，明瞭であったのである。

抹消は，本来パスカルが本格的執筆の際になんらかの障害をもたらす故に，行われたのである。障害とは，例えば抹消すべき文字が抹消されていなかった為めに，本格的執筆における原稿にこれが記されて，著者の意に反する場合が，これである。しかし『明日のために』の語は，あまりにも本文内容とかけ離れていた為め，すなわち本格的執筆になんらの悪影響も及ばさないことが，パスカルにとって，極めて明白であったため，彼としてはこの語を残存せしめても，差支えなかったのである。またこの結果に到るには，ポール・ロワイヤルにおける講話の記憶が，執筆の際にも保持されるに相違ないことが，彼にとっても予見されていたであろうことが，心理的に作用したことも，十分あり得たであろう。

Ⅶ　パスカルの書記について

(A)《$A_{(.)}$P.R.》を如何に読むか，の問題解決に至大の重要性を持つものに，パスカルの書記にかんする特性が，存する。われわれは，パスカルの書記の仕

方に見られる特性を把握するために，次に彼の書記の実例を，若干拾集することにしたい。

(1) trait d'union の省略（この例多数あり）——ex. Jésus-Christ——→Jesus Christ[16]〔——→の右辺がパスカルの書記，以下同様〕。

(2) 疑問符の省略——ex. Que dois-je faire?——→Que dois je faire (La. 27-Br. 184 の末尾)[17]。

(3) 固有名詞の語頭に小文字を使用する——ex. Persée〔ペルセウス〕——→perséé (La. 52-Br. 410)[18]。

(4) accent grave の省略——ex. à——→a (La. 26-Br. 244)[19]。

(5) accent aigu の省略——ex. pensée——→pansee (La. 62-Br. 308)[20]。

(6) 綴字の誤記——ex. 上例(5)〔pensée 中の pe が pa になっている〕。

(7) apostrophe の省略（例多数）——ex. l' autre——→l autre (La. 30-Br. 248)[21]。

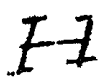
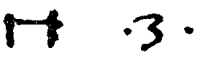
(8) point をコンマ風に書く——ex. tout cela.——→tout cela, (La.33-Br 167)[22]。

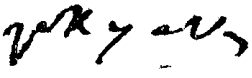
(9) 文尾の point の省略（例多数）——ex. La. 27-Br. 184 の末尾[23]。

(10) コンマの省略——ex. Inconstance, ennui, inquiétude——→Jnconstunce, Ennuy Jnquietude (La. 61-Br. 127)[24]〔終りの二語間にコンマが無い〕。

(11) i の上の point の省略（例多数）——ex. bien——→bıen (La. 34-Br. 376)[25]。

(12) 綴字 e の省略——ex. de l'eau——→d l eau (La. 57-Br. 292)[26]。

A  B 

C D 

(13) 符号を余計に附加する——ex.（i）idée——→Jdéé (La. 390-Br. 72)[27]；(ii) pensée——→penséé (La. 73-Br. 164)[28]〔語尾の e に符号がある〕。

(14) 同一略字における point の有無——ex.（i）H (La. 390-Br. 72)〔point なし—写真A〕；(ii) H. (La. 391-Br. 347)〔point あり—写真B〕[29]。

(B) 以上（1～14）を，われわれが概観するとき，パスカルの書記が極めて自由に行われていることを，われわれは知りうるであろう。これは主として，パスカルが自己用に書いたものであって，他人に見せるためでないことに因るのであるが，文字の判読に多大の支障を与えるものは，彼の書記方法が必ずしも統一的規則的ではないということである。例えば，文尾の point（終止符）を彼はしばしば省くが，しかし省かない場合も勿論存するのである。したがって，書記の上での一定の綴字・符号の有無は，直ちに彼の脳裏における真の文字（正字・略字・符号）に於けるこれらの有無とそのまま一致するわけではないのである。

例えば，(4)における如く，a とパスカルが記したとしても，彼の意図する文字が accent grave を欠いているわけではないことは，明瞭であろう。もし仮りに pensée なる語がわれわれにとって未知であるとすれば，(5) および (13) の (ii) の判読は，優に一個の問題を提起することになろう。《$A_{(.)}$P.R.》の《$A_{(.)}$》は，まさに同様の問題を，われわれに対して惹起しているのである。それゆえ《A》に point が無いからと言って，これが直ちにパスカルの念頭における本当の文字にあっても，point を欠いておるとは限らないのである——丁度(5)の pansee に accent aigu が無いからと言って，パスカルの脳裏の文字がそうであるとは，判定できないように（註 29 参照）。そうして逆に《A》に point がある場合にも，これが彼の意味する当の文字において，この point が存するとは，断定しえないのである。筆運びの余勢の結果，point が記されたとも，考えられるからである。それゆえ，書記上は何れとも決定しえないのである。

かくしてわれわれは，パスカルの『パンセ』の草稿における文字を判読する場合，極めて慎重に考察することが，要請されるのである。したがって，《A P.R.》における《A》と《P.》の「初めの二字が同じ筆の運びで続けて記され『A P.R.』となっている」[30]としても，これをもって《A》になんらの綴字・省

略点も——パスカルの意味する本来の文字において——存しないと速断することは，決して妥当ではないのである。写真（C・D）の示すごとく，d l eau（(A)の⑿参照）におけるdとlとは連続的に記されているのであり，また qu Jl y a [qu' il y a][31] におけるuとJlも，連続的筆致で記されているのである。しかしそれぞれの場合において，e, apostrophe が——パスカルの意味する語において——存しないと判定することは，不条理の極みであろう。それゆえわれわれは，《$A_{(.)}$P.R.》の《$A_{(.)}$》の判読を，即物主義的短絡主義的に行うことは，極力避けねばならないのである。即物主義的判定は一見合理的実証的のごとく見えるが，パスカルの筆蹟の示す全般的傾向を顧るとき，反って不合理であり，誤謬の危険を冒す可能性が十分存するのであって，われわれは茲に即物主義的判読法の限界を見るのである。

かようにしてわれわれは，即物的判定方法以外に，諸般の諸事情，諸状態をも勘考して，II～VIに見られるごとき論証を行ったのである。かかる広汎なる視点に立つ考察こそ，《$A_{(.)}$P.R.》の問題解決に不可欠のものと，敢えてわれわれは主張しかつ信ずるものである。

VIII　この研究のむすび

われわれは，I回より今回（XX回）に到る作業によって，パスカルの《アポロジー》のプラン復元にかんする研究を，終了することにする。既に第I回の末尾において，次の事柄が述べられていた——「まことに《アポロジー》復元の問題の解決への道は遠い，しかしながら能うるかぎり努力することは，われわれの学問的義務でなくてはなるまい。」と。この事柄は，われわれの研究終結後にあっても，なお言い得ることである。われわれ自身の研究成果の再検討ならびにより一層の充実だけでも，多くの努力を要するであろう。こうした事を含めて，今後起るべき幾多の問題にかんしても，われわれは各研究家の個人的研究のみならず，多くの人々の組織的共同研究を，期待せざるをえないのである。特に後者の研究方法は，切実に要望されて然るべきものであることを，われわれはこの際強調して止まないものである。（畢）

注

1) 前田陽一，「偉大さと惨めさ」（上）——パスカルの「パンセ』注解（141）——『心』（平凡社），1979年7月号，p. 60.
2) 同上，p. 61.
3) 同上。
4) 拙論V回のII参照。
5) Philippe Sellier, Blaise Pascal, Pensées, Paris, 1976, p. 105, note 1.
6) Pascal, OEuvres complètes, Présentation et notes de L. Lafuma, Éd. du Seuil, 1966, p. 495.
7) ibid., p. 497.
8) ibid., p. 498.
9) Lafuma, Controverses pascaliennes, Paris, 1952, p. 44.
10) J. Mesnard, Pascal, l'homme et l'oeuvre, Paris, p. 129.
11) Pol Ernst, Approches pascaliennes, Gembloux (Belgigue), 1970, p. 657.
12) この章名を附与しうる理由については，拙論XVII回のIIの(一)のb参照。
13) Pascal, OEuvres complètes, op. cit., p. 25.
14) J. Chevalier, OEuvres complètes de Pascal, Paris, 1954, p. 13. なおパスカルの講話の理由については，拙論XI回を参照のこと。
15) 《A. P. R.》の略字は，草稿中全部で4個ある。このうち，《A》に point が打たれているものは1個（La. 309-Br. 430），point のないものは2個（La. 309），残りの1個（La. 237-Br. 416）は本文中（I）に論じたごとく，何れにも解しえられる不明のものである（書記上）。
16) Le Mémorial. なお——→の左辺は現代語の字形。
17) 前田陽一著「パスカル『パンセ』注解」（第一），岩波書店刊，p. 10.
18) 同上，p. 79. パスカルの書記の多様性の一例として掲げた。彼はもちろん多くの場合大文字を用いている。
19) 同上，p. 10.
20) 同上，p. 113.
21) 同上，p. 35.
22) 同上，p. 47.
23) 同上，p. 10.
24) 同上，p. 110.
25) 同上，p. 164.
26) 同上，p. 96.
27) 同上，p. 217.
28) 同上，p. 170.

29) 写真 A・B——Homme の略字と見られる H には，普通 point が附せられるが，パスカルの書いた H の場合には，point の無いこともある，ということが分る。この場合彼は承知の上で，point を省いているのである。したがって《A(.)P.R.》の場合も，論理上《A》は point の省略と一応考えられるのであって，書記上 point を欠いている事実をもって，直ちに point のない《A》を，パスカルが念頭に置いていたと速断することは，論理上正しくないのである。われわれは，書記上の事実とパスカルの脳裏に存する真実との異同について，十分なる配慮を要するのであって，この事柄の重要性を大いに強調して止まないものである。

30) 注 1) の『心』，p. 61

31) 注 17) の前掲書，p. 32.　　（注了）

〈追記〉——(1)本文ならびに注における《A(.)P.R.》は，《A P.R.》または《A.P.R.》あるいは両者全体を，意味している。(2)本文（III）中で，「本文に近接して記されたタイトル。小見出しは，すべて本文内容との直接的関係を推測しうるもののみである」ことが，述べられているが，これについてわれわれの調査結果を詳述すると，以下のごとくである。タイトル・小見出し及びこれらと断定しえないが，これらの可能性のあるもの（すべて断章の文頭に記されたもの）の総数は，202～217 個に達する。このうち，われわれが現に問題としている《A(.) P.R.》の 2 個（La. 237-Br.416, La. 309-Br.430 の文頭のもの）を除いて，例外なくすべてが，断章内容と直接の関係を推測しうるものである。これらのタイトル・小見出し中には，一見不可解な数字・文字が見出されるが，これらは詳細に検討するとき，本文内容との直接的な係わりが発見される（以下難解と見られるもののみを挙示する）。例えば，La. 389-Br. 693, La. 390-Br. 72, La. 391-Br. 347 の各文頭に存する《H(.)》なる文字も，Homme の略字と解され，これはさらに《アポロジー》中の《Transition de la connaissance de l'hommeà Dieu》の章中に属すべきものであることを意味するものと考えられる。さらに，La. 534-Br. 658 中には，《20 V.》なる数字が見出されるが，これは当然新約中の「ルカ伝」5 章 20 節(以下）を示すものと，推定しうるのである。最後に，La. 55-Br. 955 の《751》も，出典は不明であるが，内容と関係のある事項を示す参考書の頁数と見る点で，諸家の見解は一致している。

以上の外に，われわれは抹消されたタイトル・小見出し（本文は抹消されていないもの，およびタイトル・小見出し・本文全体が抹消されているもの，断章全体が rayer されたもの）におけるタイトル・小見出しと断章本文とを検討するとき，これらは 8 個存するが，——La. 174-Br. 79, La. 251-Br. 70, La. 386-Br. 37, La. 450-Br. 601*, La. 457-Br. 577*, La. 641-Br. 576* [Éd. du Seuil に拠る], La. 643-Br. 717, La. 666-Br.623*（＊印のものは，タイトル・小見出しのみ抹消のもの)——矢張りこれらすべてに本文との直接的連関が認められるのであって，《A(.) P.R》のごとき——「ポール・ロワイヤルにおいて」と読むならば——本文と直接には無関係なあるいは極めて間接的な関係しか持たないものは，皆無である。